

8月16日 長野県下伊那郡阿南町新野 盆踊り

新野の盆踊りは14日から16日までである。そのうち16日は特に立派で、徹夜で踊る。尤も始まるのは10時頃からで、大人の踊りとなるのは夜中の12時を過ぎてからである。

盆の精霊の迎えの方は新野では見ていないので分らない、が、精霊送りの方は盆踊と可なり複雑な関係がある。

まづ新野では盆踊りは8月14日から3日間、それ以外のときは踊ってはならないという伝承が固く守られている。しかもその最終の時が非常に明確で、昔の村境である慈光院の庭で切子灯籠を積重ね、道切りの式をやって、鉄砲を1つドカンと打ったときを以って終りとする。

もとは盆踊りは新野にも随分数多くの歌の種類があったらしい。それを大正14年に新野の学生会や青年団が改革を喚び大正15年に柳田国男がそれを認めて、新野本来の踊り歌と考えられる。現在の7種の踊歌を基本に「踊りの会」が出来たらしい。

すくいさ（扇子の手） 音頭（扇子の手） 十六（手踊）  
高い山（手踊） おさま甚句（扇子の手） おやま（扇子の手）  
能登（手踊）

そのうち、能登以外の6種は順序、日など関わらず、何時歌ってもよいが、能登は16日の踊りの最後（正確に云って17日の手前6時頃）櫓にかけてある切子を外して、これを持って行列をつくり太子堂へ和讃を唱えつゝ進み初めるときにのみ踊る。

次に16日の夕方、わらび庵の一行が見学に来て、保育院で特に採集している際にも、能登だけはやれないとリハールをやるのに可なり抵抗があった。

盆踊りは7つの全曲とも囃しは一切ない。唄のみである。新野の街の中央にある市神様を14日の夕方祭って、その前に櫓を組む。この櫓の上に4人の踊り子が上って音頭をつとめる。音頭役は踊りの会のメンバー27人のうち交替で上る。櫓の上では音頭の歌出しと、踊りの正格な型を見せることになっていて、外のものは、これを見本に櫓の周囲を輪になって踊るのである。誰が踊ってもよい。扇子だけは持って行かぬと踊りにならぬ。交替中のメンバーも輪の要所々々に入っていて教えて呉れる。16日は約2,000人。村の人も外来者も踊る。そのため村の中央道路は櫓の所を中心に長く約300米に亘って両側に並ぶ。車は勿論通行止め。

各曲の変るとき最初に出す歌詞は決っていて、音頭がその歌を唄い出すと、踊り子は扇子を開いて手にしたり、或いはたたんで腰にさして、新しい曲の舞振りになる。その曲に特有な歌詞が2つ3つ唄われると、その後はどの歌を唄ってもよいことになっていて、同じ曲で音頭の出す歌で返しをつけてゆく。この各曲に共通の歌が何百首もあって、古老の上手のうちには1晩中音頭をとっていても決して同じ歌は2度と繰返さないことを自慢にしているものもある。踊り子がだれ気味になって来ると音頭取は余り踊りがそくばくするに調子整へて手をたたけと踊り子の緊張を要求する。又音頭取りが踊りの曲を変更しようとするときは

余り踊りが退屈したに踊りよ替えましょ御連中に

と予告して、その次から新しい曲の歌になる。又音頭取りが交替するときも

わしの音頭は声かれました。わたしますぞ 御連中に音頭わたさば受取りますが、うたのつまずきやごめんない

で別の音頭取りになる。このようにして1晩中切れ目なく、休憩もなく踊り続けられるのである。

もとは新仏の家の前で慰霊供養のため踊った。市神様はもとは時々市が立ったときの商売繁昌の神様として祀られたのが、いつか市神様が踊りの中心となった。

16日には夕方までに盆棚をまつた家では、川端で精霊流しをやる。盆の草花や、野菜の馬など造って、線香、小松明など堰の門端に残っていた。この精霊流しをしたあと新盆の家では切子灯籠を1つだけ、流さずに、櫓の下へ持ち寄って櫓の柱にかける。16日の踊の櫓は、だから切戸灯籠が沢山吊されてある。家から送り出した精霊は、まだ村に止まっているので、その夜は村中あげて盆踊りを盛大にして供養し、翌朝、霊を村境まで村中して巡るのである。

17日の早暁。白け初める頃、市神様の前で市神様和讃を唱え初め、切戸灯籠を灯籠を櫓から移して唱和する。それから太子堂へ行列が進むが、そのとき踊りは初めて能登の曲になる。行列は先頭から、先達、（途中ナンマイダンボ、ナンマイダンボ、と称えつゝ行く）行者、鉦、鉄砲、その後切子灯籠をかついだ子供が従う。

踊り子達は名残を惜しむように、かたまってこの行列の行手をはばむように輪をつくって、こゝを先途と能登を踊る。この踊りの輪を先達が搔わけるように進み。行列で輪が崩れるとまた先へ走って行って輪をつくって踊る。村外れまでこれが続いて輪がくづれると踊りも行列に加わって村境の慈光院の馬頭観世音の碑のある広庭まで行き、こゝで集った切戸灯籠を、くづして積重ねる。

先達が呪文を称え、九字を切り、太刀を抜いてその灯籠の山を切る（これを道切りの式という）。同時に鉄砲が1ぱつ鳴って、これで盆踊歌はもはや歌ってはならないという。

切子灯籠には火がつけられ焼かれる。同時に朝露にぬれた空に1人の歌出によって秋歌が歌われる。

秋が来たとして鹿さへ泣くになぜか紅葉が色づかぬ。慈光院への石だん道にはもう芒が穂を出していた。